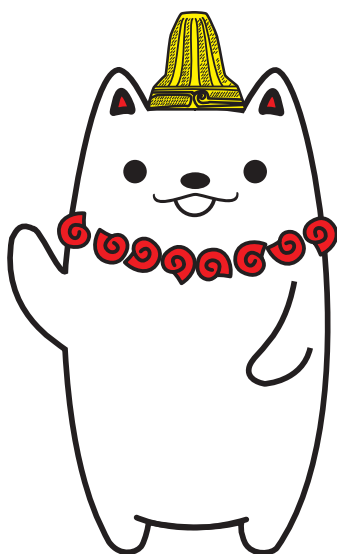


令和2年度

千葉市遺跡発表会要旨



加曾利貝塚PR大使かそりーぬ

日	時	令和3年2月27日（土）
会	場	千葉市生涯学習センター
主	催	千葉市教育委員会

令和2年度 千葉市遺跡発表会

プ ロ グ ラ ム

◎ 開会のあいさつ

13 : 00～

【成果報告】

「特別史跡加曽利貝塚発掘調査速報」
加曽利貝塚（若葉区桜木）

松田 光太郎
（千葉市埋蔵文化財調査センター）

13 : 05～14 : 00

休憩（20分）

【講 演】

「土気の旧石器時代と日本列島」

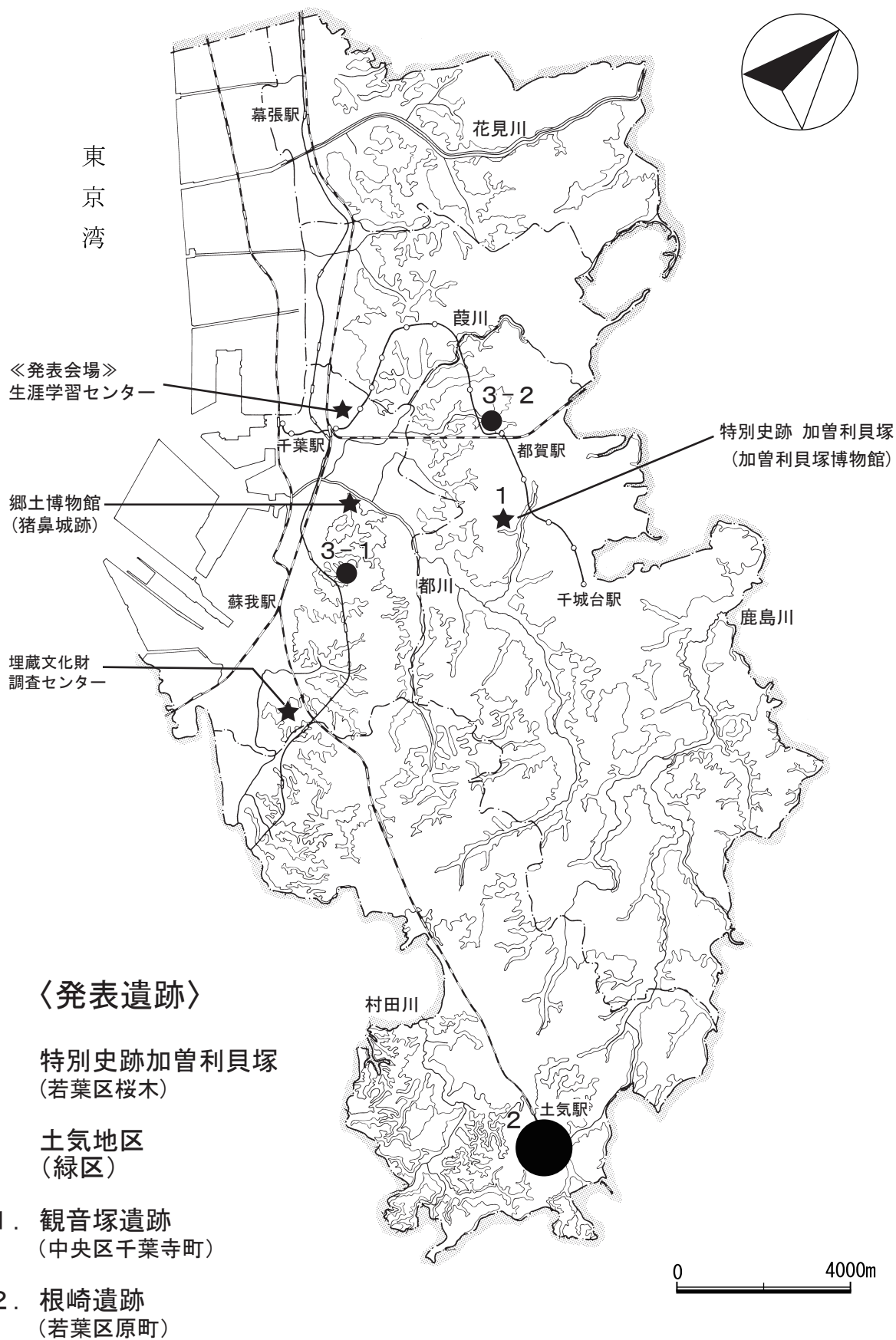
安蒜 政雄
（明治大学名誉教授）

14 : 20～16 : 00

【紙面発表】

「令和2年度の発掘調査成果速報
—観音塚遺跡・根崎遺跡—」

小林 嵩
（公益財団法人千葉市教育振興財団）



〈発表遺跡〉

- 1. 特別史跡加曾利貝塚
(若葉区桜木)
- 2. 土気地区
(緑区)
- 3-1. 観音塚遺跡
(中央区千葉寺町)
- 3-2. 根崎遺跡
(若葉区原町)

遺跡位置図

【成果報告】

『特別史跡加曾利貝塚発掘調査速報—令和2年度調査』

千葉市教育委員会 松田光太郎・青笹早季・井出祥子・千葉南菜子

1 遺跡名 加曾利貝塚（かそりかいづか）**2 所在地** 千葉市若葉区桜木二丁目

3 遺跡の概要 特別史跡加曾利貝塚は、千葉市の中央部、都川の支流である坂月川の西岸の、標高 30m 前後の台地上に位置しています。本貝塚は直径約 140m の北貝塚と長径約 190m の南貝塚という 2 つの環状貝塚が 8 字形に連結した日本最大級の貝塚で、縄文時代中期・後期を中心とした貝塚として知られています。千葉市では本貝塚を新たに解明するため、平成 29 年度～令和元年度、南貝塚において、本貝塚の終末期にあたる縄文時代晩期を対象とした調査を断続的に行い、晩期まで集落が存続していることを明らかにしました。また史跡整備に伴う調査を令和 2 年 2～3 月、8・12 月に実施しました。今回は令和 2 年度に開始した、南貝塚中央窪地の解明を目的とした発掘調査（第 16 次調査）の概要を説明します。



第 1 図 遺跡位置図

4 調査の成果

南貝塚は中央部に向かって標高が低くなる窪んだ地形をなしています。この南貝塚中央窪地の解明を主たる目的とした発掘調査を令和 2 年 10 月 1 日～11 月 28 日に実施しました。調査範囲は南貝塚の中央部 (860 m²) と東傾斜面南部 (36 m²) の 2 地点で、合計の面積は約 896 m² です (第 3 図)。このうち東傾斜面南部は関東ローム層の層序の確認と土層サンプル採取を目的としたもので、2 m × 2 m の範囲を深さ約 2 m まで掘削し、鹿児島県始良カルデラに給源をもつ始良丹沢火山灰 (AT) などの火山灰を確認しました (第 2 図)。

一方、南貝塚は昭和 39 年に発掘調査が行われており、互いに直交する 6 つの旧調査区 (旧 I～VI トレンチ) が掘られていました (第 3 図)。今回の発掘は南貝塚中央部を主とし、そこから北側の貝層分布域までを対象範囲としたため、旧 I・II・IV トレンチが発掘調査範囲に含まれ、この 3 つの旧トレンチの再発掘を行いました。その結果、旧 I トレンチ内で縄文時代の竪穴住居跡 2 軒 (65 号・81 号竪穴住居跡) を再確認すると共に、81 号竪穴住居跡に重複する溝状遺構や柱穴の存在を新たに確認しました (第 4 図)。竪穴住居跡の時期については、昭和 39 年の調査で、65 号竪穴住居跡が縄文時代中期後葉、81 号竪穴住居跡が縄文時代後期末葉と報告されています。

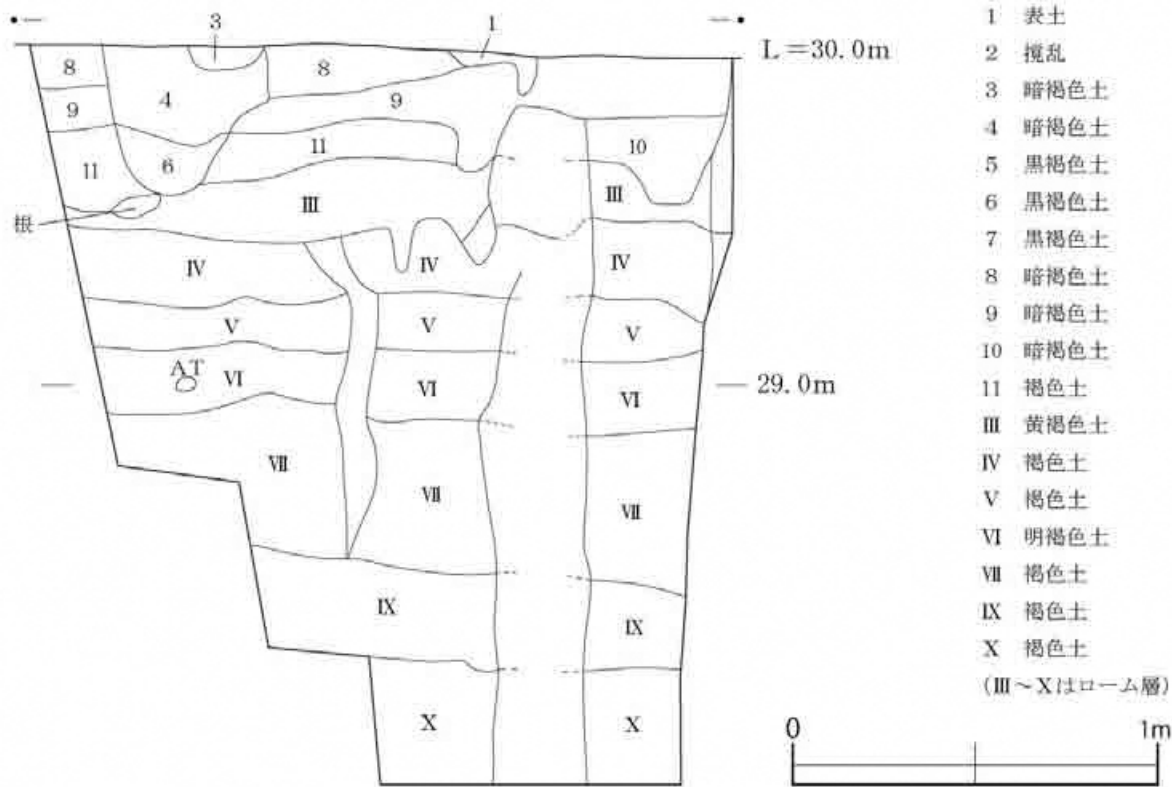
貝層は発掘調査範囲の北側で確認されました。当初 (発掘調査着手前) は第 3 図の点線の範囲に貝層が存在すると想定していました。表土 (約 20 cm) を除去した状況では、ほぼ同様の範囲に貝層が確認されましたが、旧 I トレンチ内で土層断面を観察したところ、貝層の上部は、現代に移動させられた貝層で、縄文時代の位置を保ったものではないことがわかりました。この攪乱貝層を除去したところ、本来の位置を保っている貝層を確認しましたが、その分布範囲は第 4 図の点線のようになり、当

初の想定より少し北寄りの範囲となりました。

貝層の厚さは、旧 I トレンチ内で見える限り、攪乱貝層を除くと、90 cmほどあります。しかし貝層の最下面はまだ確認できていないので、もう少し厚くなる可能性があります。貝層下半には焼土や灰が水平に堆積している箇所があり、貝層堆積初期の段階で、地ならしと焚火行為が行われていたようです。貝塚は単なるごみ捨て場ではなく、人間の諸活動が行われていたことを示していると言えます。貝層については今年度の調査ではその表面を確認しただけですが、貝層上面からは縄文時代後期の土器が出土しました。

調査範囲の南側は南貝塚の中央部にあたります。中央部は、地表面の標高が貝層のある北側に比べ 2mほど低くなっていますが、旧 I トレンチ内で確認する限り、ここは遺構がほとんどなく、広場となっていたようです。また縄文時代の後期以降と思われる遺物包含層が存在していますが、この包含層は関東ローム層直上に存在し、縄文時代早期頃に相当すると思われる土層が見当たりませんでした。このことから人為的削平の可能性も考えられました。

今回の調査により、貝層は南貝塚の外縁部に環状に巡り、その少し内側に竪穴住居跡があり、中央の窪んだ部分（中央窪地）は遺構が希薄な広場となっているという構造がとらえられました。南貝塚においては貝層や遺構が計画的に配置されていたことが確認されたわけですが、未確認の遺構は他にもあり、遺構と貝層の関係のさらなる解明が必要です。また環状貝塚における中央の広場については千葉県内にも事例があり、祭祀場説や作業場説などの見解が出されているものの、加曽利貝塚はそのうちのどれに該当するのかが明確にできていません。さらに加曽利貝塚の中央窪地の成因については、自然窪地説と人為掘削説が出されており、見解の一致をみていません。これらの問題については次年度の調査で継続して取り組んでいく予定です。

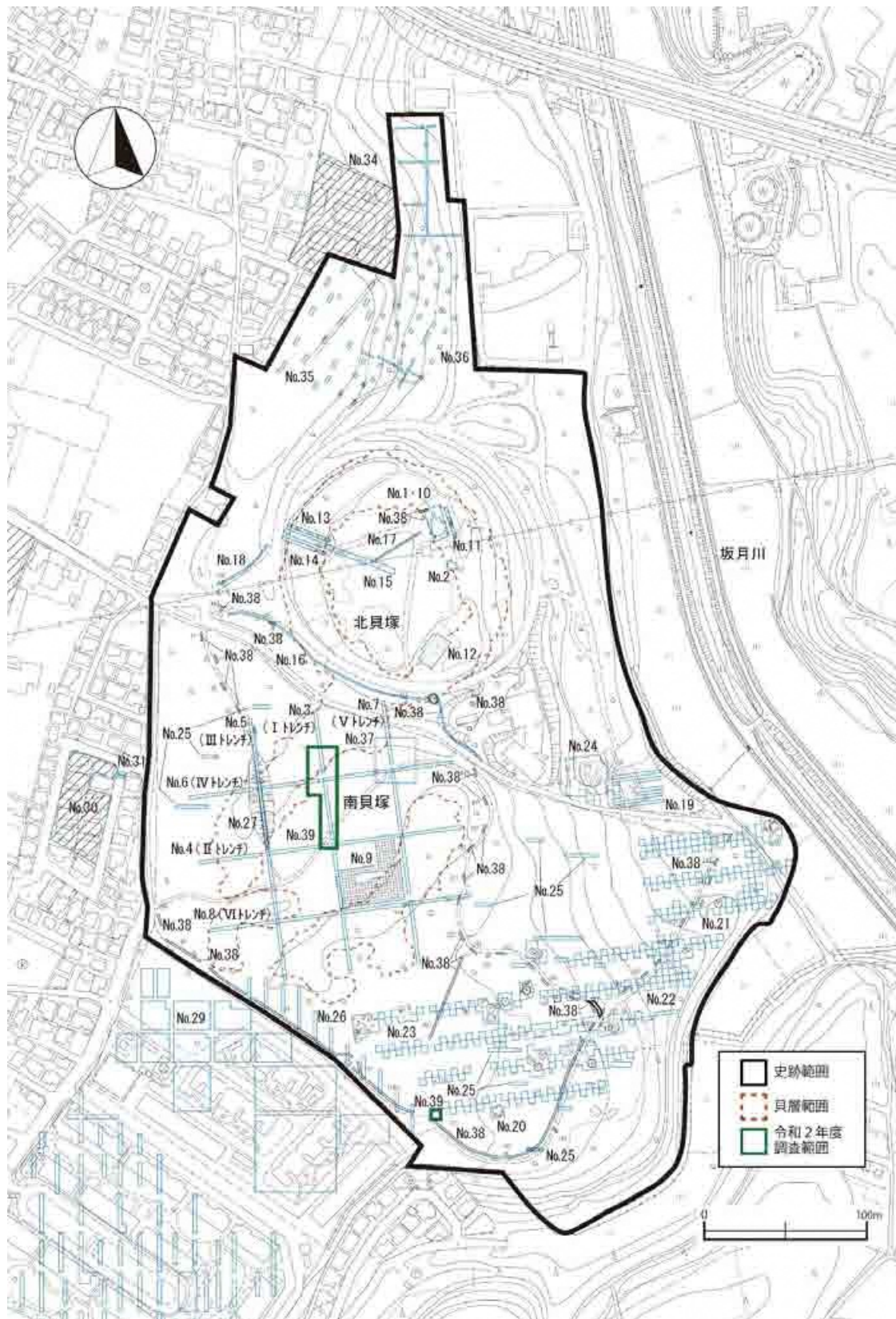


第2図 東傾斜面南部土層断面図

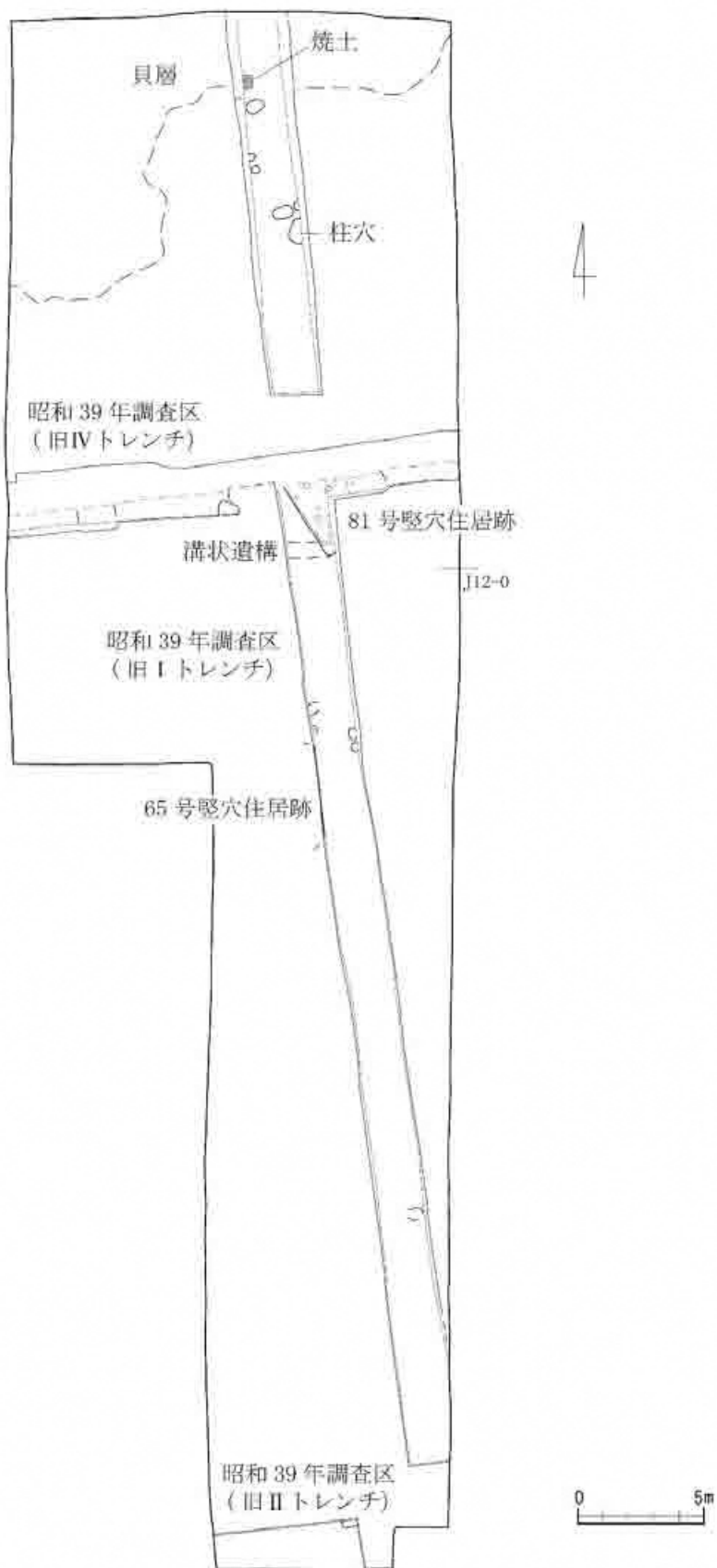
第1表 加普利貝塚調査一覧

地点No.	調査次	区分	調査年
1・2	第1次	北貝塚	1962(昭和37)年
3～9	第2次	南貝塚	1964・1965(昭和39・40)年
10～12	第3次	北貝塚	1965・1967(昭和40・42)年
13～15	第4次	北貝塚	1966・1967(昭和41・42)年
16～18	第5次	北貝塚	1968(昭和43)年
19	第6次	東傾斜面	1968(昭和43)年
20～23	第7次	東傾斜面	1970～1973(昭和45～48)年
24	第8次	東傾斜面	1973・1974(昭和48・49)年
25	第9次	南貝塚・東傾斜面	1986～1988(昭和61～63)年
26～28	第10次	南外縁部・南貝塚・東傾斜面	1989・1990(平成元・2)年
29	第11次	南外縁部	1984(昭和59)年
30～33	第12次	西外縁部	1977・1978・1980・1989(昭和52・53・55・平成元)年
34～36	第13次	北外縁部	1983・2013・2014(昭和58・平成25・26)年
37	第14次	南貝塚	2017～2019(平成29～令和元)年
38	第15次	南外縁部ほか	2019～2020(令和元・2)年
39	第16次	南貝塚・東傾斜面	2020(令和2)年

* 地点No.は第3図に対応。但しNo.32・33は第3図範囲外。



第3図 調査地点位置図



第4図 遺構配置図



調査区全体



貝層 (旧 I トレンチ)



65号竪穴住居跡



81号竪穴住居跡と溝状遺構



中央窪地

【講演】

とけ
『土気の旧石器時代と日本列島』

明治大学名誉教授 あんびる 安蒜 まさお 政雄

I 日本列島の旧石器時代

1 日本旧石器時代の古さ

日本の旧石器時代研究は、1949年に始まる。場所は、群馬県の岩宿^{いわじま}。岩宿遺跡には3分される旧石器時代のうちで最も新しい、後期旧石器時代が埋もれていた。以後、後期の遺跡発見が続き、次第により古い中期や前期の旧石器時代に関心が寄せられていく。

そうした中で1967年、前期と中期の旧石器時代を巡る存否論争が表面化。その長引く論争が、4半世紀におよぶ前・中期の遺跡捏造を引き起こす。この捏造が2000年に発覚した時、学界は新発見の連続が学問の不在を招く教訓を学んだ。以来、今日なお、前・中期旧石器時代の存否論争に決着はついていない。

一体、日本旧石器時代は、どこまで古く遡るのか。4つの見解に分かれる。まず、中期以前の旧石器時代には遡らないとする前・中期否定派。逆に、中期以前の旧石器時代にまで遡るとする、前・中期肯定派。つぎに、中期はあったが前期はなかったとみる、前期否定・中期肯定派。反対の、中期はなかったものの前期があったとみる、前期肯定・中期否定派。

いずれの立場をとるにせよ、時代の存在を裏付ける証拠に乏しく、示準石器と文化内容が定かではないという、共通の欠点をかかえている。ちなみに、後期旧石器時代の場合、遺跡の発見数は1万カ所をこえ、時期を追って交替する示準石器が明らかにされ、明確な文化の階梯^{かいてい}がとらえられている。記憶すべき点は、かつては誰一人として、この後期旧石器時代の存在すらも信じなかった研究の歩みだ。

2 後期旧石器時代の文化と編年

日本列島の後期旧石器時代には、5つの示準石器がある。ナイフ形石器と槍先形尖頭器^{やりさきがたせんとうき}それに矢出川系細石器^{やでがわいさいせつき}および湧別系細石器^{ゆうべつ}と剥片尖頭器^{はくへん}で、いずれもヤリの穂先だ。その意味で、後期旧石器時代の歴史を、ヤリの文化史とみることができる。そして、後期旧石器時代の日本列島では、示準石器名を冠した5つの文化が発達をとげた。

だが、各文化は、日本列島の各地で同じように展開したわけではない。九州・四国・本州では、ナイフ形石器と槍先形尖頭器それに矢出川系細石器が順次、文化の階梯を築いた。一方、北海道にはそれらがなく、湧別系細石器が唯一の文化階梯だ。また、剥片尖頭器の文化階梯は、九州にのみ認められる。そうした文化と階梯の地域的な差は、日本列島の古地形に由来するところが大きい。

というのも、後期旧石器時代の日本列島は、今日とは随分と違いかたちをしていたからだ。北海道はユーラシア大陸と陸続きの半島で（古北海道半島）、本州は九州・四国と接続して太平洋に浮かぶ1

つの島（古本州島）。その一方、琉球諸島は、すでに島嶼化していたようだ（古琉球諸島）。そうした、半島・島・島嶼部で異なる在り方をみせた文化の階梯とその移り変りを対比すると、後期旧石器時代を第Ⅰ期から第Ⅴ期までの5時期に区分することができる。

古本州島の後期旧石器時代は、第Ⅰ期のナイフ形石器文化が、第Ⅳ期の槍先形尖頭器文化に変わり第Ⅴ期の矢出川系細石器文化へと推移した。その間に第Ⅲ期の九州域に剥片尖頭器文化が出現し、ナイフ形石器文化に割り込む。これに対し、古北海道半島の後期旧石器時代は第Ⅲ期の湧別系細石器文化に始まり、同文化は第Ⅳ期に古本州島に渡って、東北域のナイフ形石器文化に取って代わる。この湧別系細石器文化は、その後、槍先形尖頭器文化および矢出川系細石器文化と対置した。そして、古琉球諸島はといえば、石器の文化はなく、第Ⅲ期以降に貝器の文化が営まれたようだ。なお、剥片尖頭器文化は朝鮮半島域を、湧別系細石器文化はシベリア域を、それぞれ核地帯としている。

Ⅱ 土気遺跡群の成り立ち

1 土気遺跡群の構成

日本列島に残された後期旧石器時代の遺跡数は、世界的にも希少な多さで、東アジアでも突出している。その日本列島でも、関東平野は、日本最大級の遺跡密集地帯として著名だ。別けても、千葉県域の下総台地は、総数の約1割に達する全国一の遺跡数を誇る。旧石器時代の遺跡は、一般に、小河川の流域に沿って群在するが多い。

下総台地の遺跡も、利根川と東京湾それに太平洋に注ぐ諸河川で刻まれた、樹枝状に入り組む谷の縁辺に集中し、随所に遺跡群を構成している。その下総台地の南端に、大小30余遺跡が群在する土気南遺跡群（以下、土気遺跡群）がある。中でも南河原坂第3遺跡は、土気遺跡群を代表する、大規模遺跡の1つだ。

ところで、旧石器時代の遺跡を発掘すると、通常、出土する石器は数カ所にまとまって分布する。このブロックと呼ばれる石器の分布は、そこで何回か石器を作った作業場だ。各作業場で作られた1回ごとの石器のまとまりを、スポットという。また、ブロックに折り重なるスポットの個々で用いられた石器の原料を調べてみると、ブロック専用のもとの他のブロックと共用しているものに分かれる。互いに石器の原料を共用し合うブロックの集まりには、ユニットの名がある。

ユニットは遺跡を形作る石器分布の単位で、旧石器時代人が移動生活で組んだ集団の最も小さい群れを反映してもいる。旧石器時代の集団は、時に他のユニットとも石器の原料を共用したり同じ場所に居住するなどして、離合集散しながらの移動生活を繰り返していた。そして、遺跡から出土する一連のブロックが互いに異なるユニットの関係でくられてくる時、それぞれに地点名を与える場合も多い。南河原坂第3遺跡は、そのような地点の集合体だ。なお、各遺跡・地点から出土する石器の総体を、石器群と呼ぶ。

2 南河原坂第3遺跡の性格

南河原坂第3遺跡には、AからJまでの10の地点がある。10地点は、樹枝状に発達した尾根の頂部に開ける、東西300m・南北150mほどの平坦部を取り巻くように並ぶ。そのうち、C・E・G・H・I・Jの各地点は、それぞれ地層を別にして石器群が上下に重なる、いわゆる重層遺跡だ。C・E・

I 地点には上下2つの石器群があり、G・H・J 地点では上中下3つの石器群が出土した。南河原坂第3遺跡では、前者の上層を第Iとし下層を第IIの、また後者の上層を第Iとし中層を第IIそれに下層を第IIIの各文化層と呼び分けている。

こうした文化層の重層は、その地点に居住した頻度の高さを示し、狩猟採集民であった旧石器時代人にとっての、狩場の要地と目される。なお、J 地点の第I文化層からは、旧石器時代ではなく、縄文時代初頭の石器群が発掘された。したがって、南河原坂第3遺跡には、都合10地点、合わせて18石器群が残されたことになる。

その10地点・18石器群の古さを時期別にみると、第I期の該当例はなく、J 地点第III文化層の第II期が最古となる。以降、古い方から順に追う。まず、E 地点第II文化層・G 地点第III文化層・H 地点第III文化層・I 地点第II文化層の4地点4石器群が第III期。ついで、A 地点・B 地点・C 地点第I文化層・同第II文化層・D 地点・E 地点第I文化層・G 地点第I文化層・同第II文化層・H 地点第II文化層・J 地点第II文化層の8地点・10石器群が第IV期。さらに、F 地点・H 地点第I文化層・I 地点第I文化層の3地点3石器群が第V期でつく。

すなわち、南河原坂第3遺跡は、第II期から第V期の居住場所で、ことに第IV期を中心に前後する第III期と第V期にかけて、最も旧石器時代人の活動が盛んとなる。これは土気遺跡群全体におよぶ傾向で、一帯は第III期に本格化し第IV期の最盛期をへて第V期に衰退を迎える狩場であった。世は、ナイフ形石器文化から槍先形尖頭器文化そして矢出川系細石器文化へと進展する時代だ。では、その第III期から第V期の時代とは、日本旧石器時代史にどんな動きが起きていたのか。

Ⅲ 土気遺跡群の時代

1 独自の石器作りの展開

最終氷期の最寒冷期に当たる第III期は、日本旧石器時代の一大変動期だ。古本州島の九州域では第I期に出現した数に数倍する遺跡の急増が起こり、それまでほぼ無人状態だった古北海道半島には一斉に遺跡が分布し出す。古琉球諸島でも、この頃から人類の活動が活発となる。こうした状況下、古本州島内九州域では第I期以来のナイフ形石器作りが、新たに登場した剥片尖頭器作りと接触した。一方、古北海道半島では湧別系細石器作りが、古琉球諸島では貝器作りが、それぞれ開始する。

ちなみに、ナイフ形石器作りと剥片尖頭器作りとの間には、厳然とした差がみられる。ナイフ形石器は、石材原産地で入手した原料を狩場に運び込み、移動生活の先々で逐次作り使われた。片や剥片尖頭器は、石材原産地で一度に沢山作って狩場に持ち込み、移動生活の先々で使い切る。ナイフ形石器作りが狩場方式だとすると、剥片尖頭器作りは原産地方式だ。

その方式が違う石器作りどうしが接触した後、どう展開したか。初め、双方は別々の方式で作られながらも、ナイフ形石器と剥片尖頭器は同じ狩場で一緒に使われ、共伴する関係がつづく。やがて、剥片尖頭器は姿を消すが、原産地方式の大規模な石器作りは、第III期の国府系ナイフ形石器作りから第IV期の槍先形尖頭器作りへ、さらに第V期の矢出川系細石器作りへと受け継がれていく。国府系ナイフ形石器・槍先形尖頭器・矢出川系細石器作りは、当該時期の東アジアにはない、古本州島独自の石器製作技術だ。なお、狩場方式による第I期以来のナイフ形石器は、第IV期の段階まで継続し、原産地方式で作られた槍先形尖頭器と共伴する。

と同時に、この九州域に端を発した古本州島固有の技術は、関東・中部域へと北上し、土気遺跡群

に至った。これに対し、第Ⅲ期の古北海道半島に姿を現わした湧別系細石器作りは、第Ⅳ期には古本州島の東北域へと南下し、順次、ナイフ形石器作り・槍先形尖頭器作りと接触した。だが、いずれとも共伴しないまま一緒に使われることもなく、分布圏を違えて対向した。

2 原日本列島人の誕生

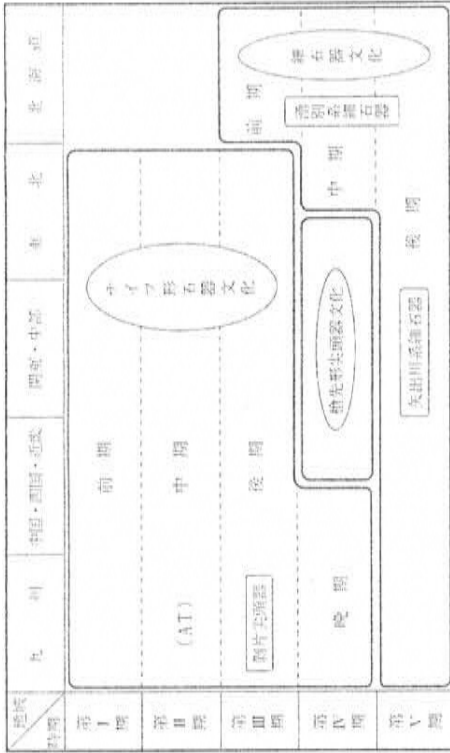
古本州島にナイフ形石器とともに遺跡が出現したのは第Ⅰ期で、古北海道半島に湧別系細石器が登場し遺跡が分布し出すのが第Ⅲ期。その第Ⅲ期に古本州島の九州域に剥片尖頭器が姿をみせ、遺跡の数が激増した。これらの現象は、第Ⅰ期と第Ⅲ期の2度にわたり、旧石器時代の日本列島に人類が大挙して移り住んできた証左に他ならない。アフリカを出た現生人類の世界拡散がもたらせた第Ⅰ期の渡来を旧移住（者）、最終氷期最寒冷期を背景とした第Ⅲ期の渡来を新移住（者）という。

旧移住は古本州島内にとどまり、新移住は古本州島の九州域と古北海道半島を窓口として、南と北の地ではほぼ同時に起きた。そこで、新移住に南と北の違いを冠せば、朝鮮半島域からきた前者は南方系で、シベリア域からの後者が北方系だ。こうして、日本列島には、古さと移住元が異なる、3者3様の旧石器時代人の存在が識別されてくる。そして、石器の共伴を文化の融合それに人類の同化とみなす時、後期旧石器時代の日本人類史に、以下のような系統樹を描くことができそうだ。

まず、古本州島に渡来した旧移住者を「古い旧石器時代人」とすると、新移住者は「新しい旧石器時代人」となる。つぎに、古い旧石器時代人が先住する、古本州島に渡来してきた南方系の新しい旧石器時代人を「南の旧石器時代人」とすれば、ほぼ無人の、古北海道半島に姿を現した北方系の新しい旧石器時代人は「北の旧石器時代人」。

その南の旧石器時代人と古い旧石器時代人とが同化を重ねながら、古本州島を北上する過程で、国府系ナイフ形石器作りを創造し、槍先形尖頭器文化と矢出川系細石器文化が築かれてきた。この日本列島特有で極めて個性にとむ石器作りと文化の階梯を残した、古い旧石器時代人と南の旧石器時代人が同化して誕生した旧石器時代人こそ、「原日本列島人」の名にふさわしい。一方で、北の旧石器時代人は、古本州島にいた古い旧石器時代人や南の旧石器時代人それに原日本列島人と同化せず、終始一貫した血筋を保ちつづける。

以上のように、後期旧石器時代の日本人類史は、古い旧石器時代人を起点として、原日本列島人と北の旧石器時代人とに至る系譜をたどった。ただし、古琉球諸島に渡った人類については、今のところ定かな系譜の裏付けがとれない。すなわち、土気遺跡群に残されている第Ⅳ期と第Ⅴ期の石器群は、第Ⅲ期に九州の地で誕生をみた原日本列島人に連なる足跡だ。

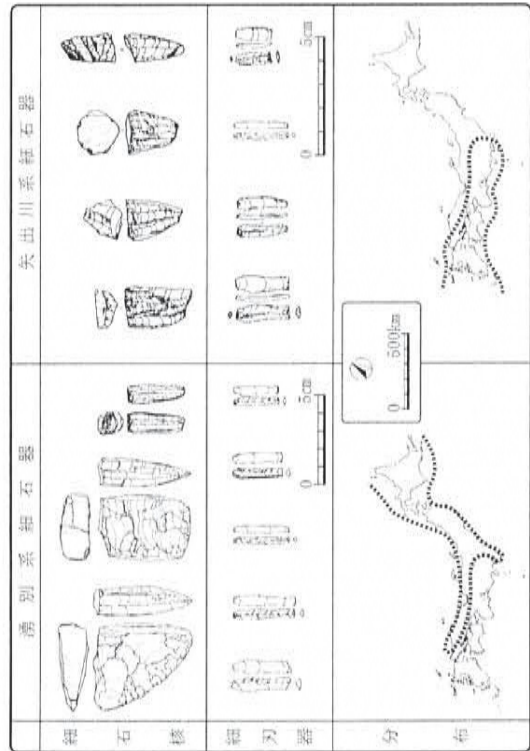


第3図 日本旧石器時代の文化と階梯



1~3: ナイフ形石器 4: 槍先形尖頭器 5: 投槍器 6: 細石器

第1図 日本旧石器時代の示準石器



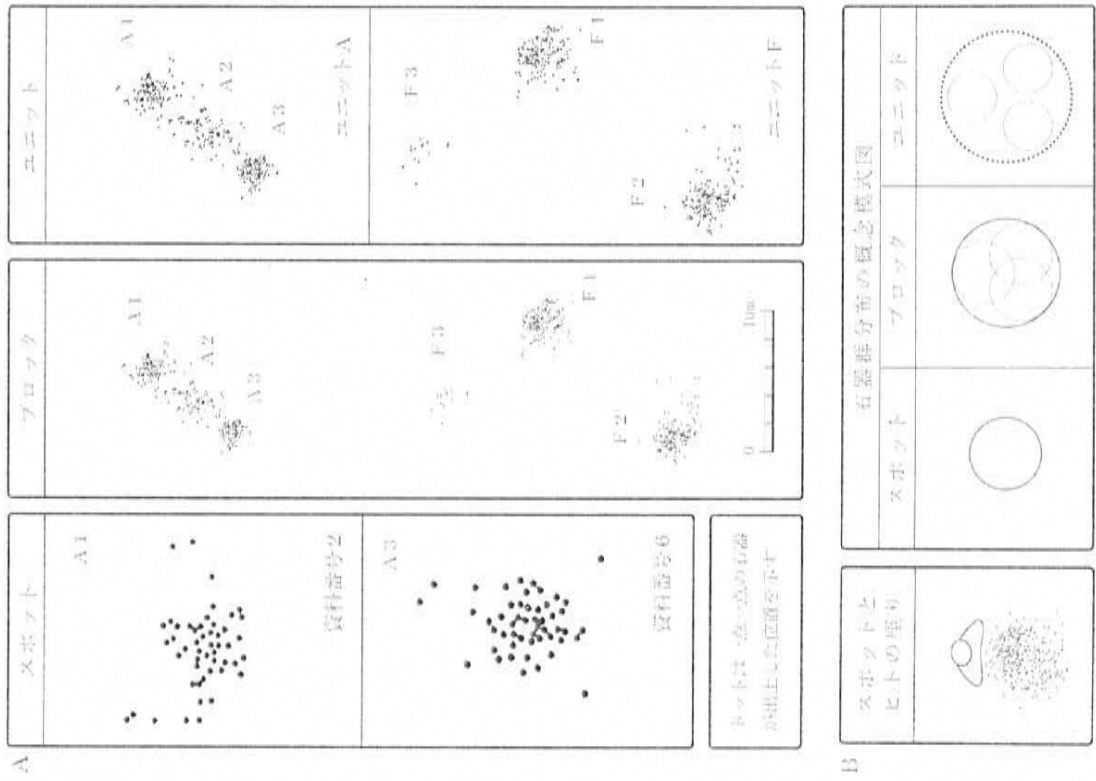
第2図 濁別系細石器と矢出川系細石器

石器時代区分の歩み	
1836年	石器時代・青銅器時代・鉄器時代の区分:C.J.Thomsen(①)
1865年	旧石器時代・新石器時代(Palaeolithic/Neolithic)の区分:J.Lubbock(②)
1909年	中石器時代(Mesolithic)の設定:J.de Morgan(③)
1962年	芹沢長介「前期旧石器時代」説:中期旧石器時代以前の存在の主張(④)
1965年	杉原荘介「先土器時代」説:前期・中期旧石器時代の存在を否定(⑤)

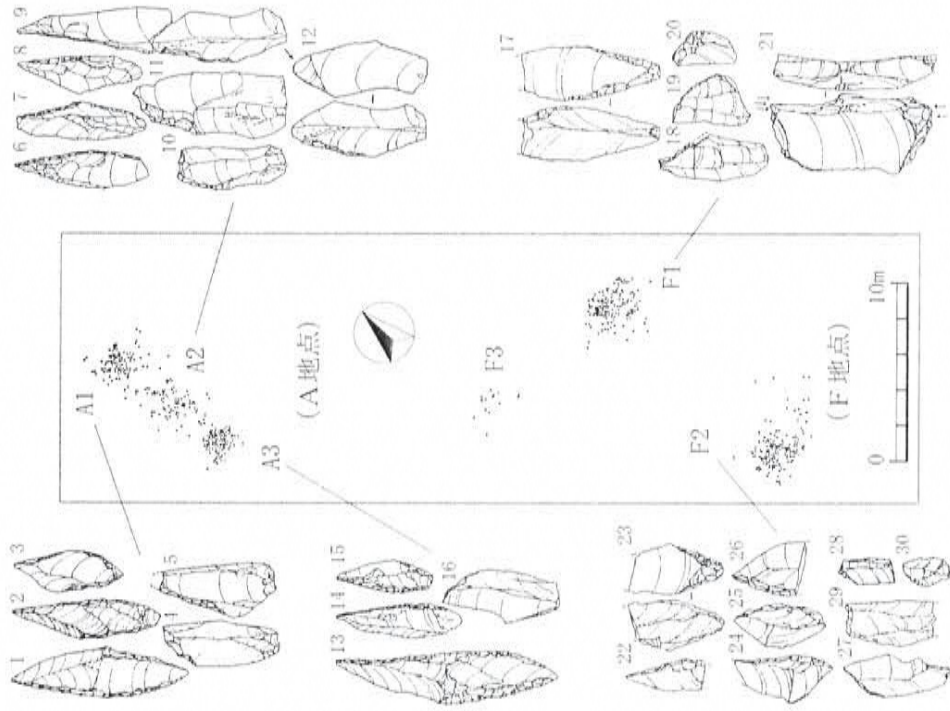
Thomsenの区分①	石器時代
Lubbockの区分②	旧石器時代 新石器時代
Morganの区分③	旧石器時代 中石器時代 新石器時代
旧石器時代の3分法	旧石器時代 中石器時代 新石器時代
芹沢長介の学説④	前期旧石器時代 中期旧石器時代 後期旧石器時代 旧石器時代 中石器時代 新石器時代
杉原荘介の学説⑤	先土器時代 原土器時代 縄文時代

第4図 石器時代の区分

『遺跡の構造』



第2図 砂川遺跡のスポット-ブロック-ユニット



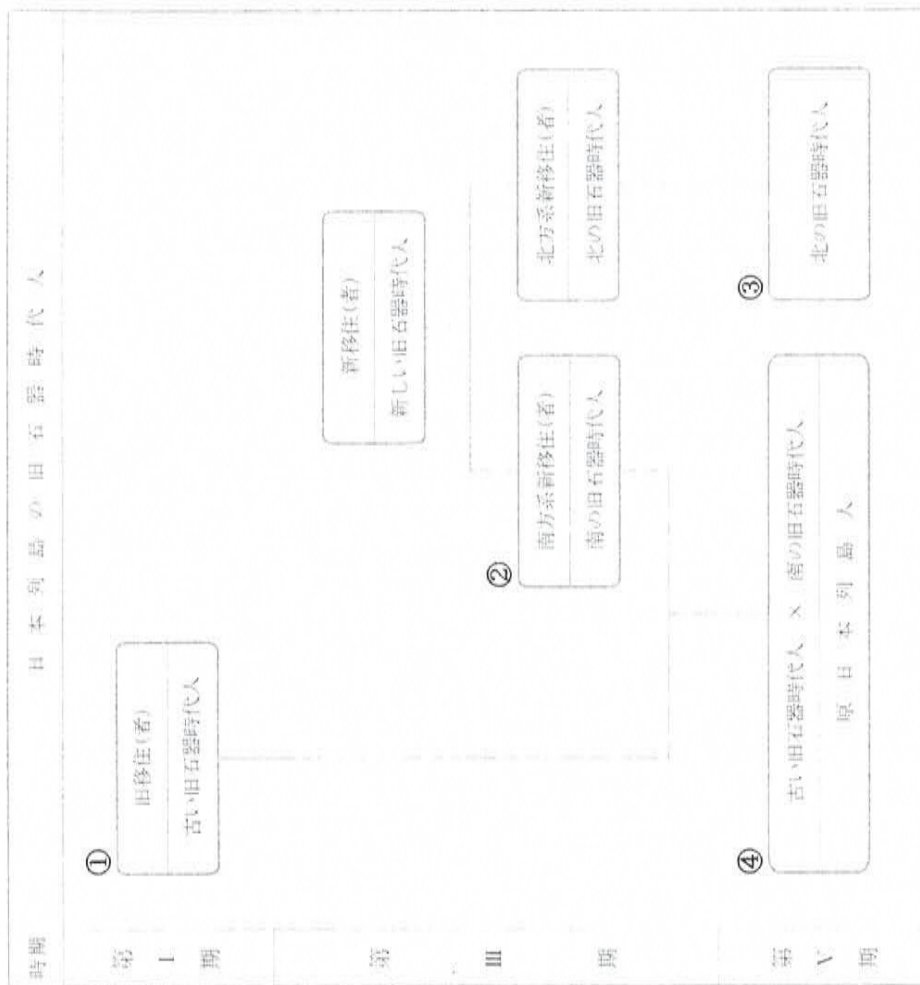
第1図 埼玉県砂川遺跡の地点と石器群の分布
 1~3, 6~10, 13~15, 22~26: 刺突形ナイフ
 4~5, 10~11, 16, 18~20, 27~30: 切截形ナイフ
 12, 21: 影器

『南河原坂第3遺跡の構成』



第1図 南河原坂第3遺跡の立地と地点

『原日本列島の誕生』



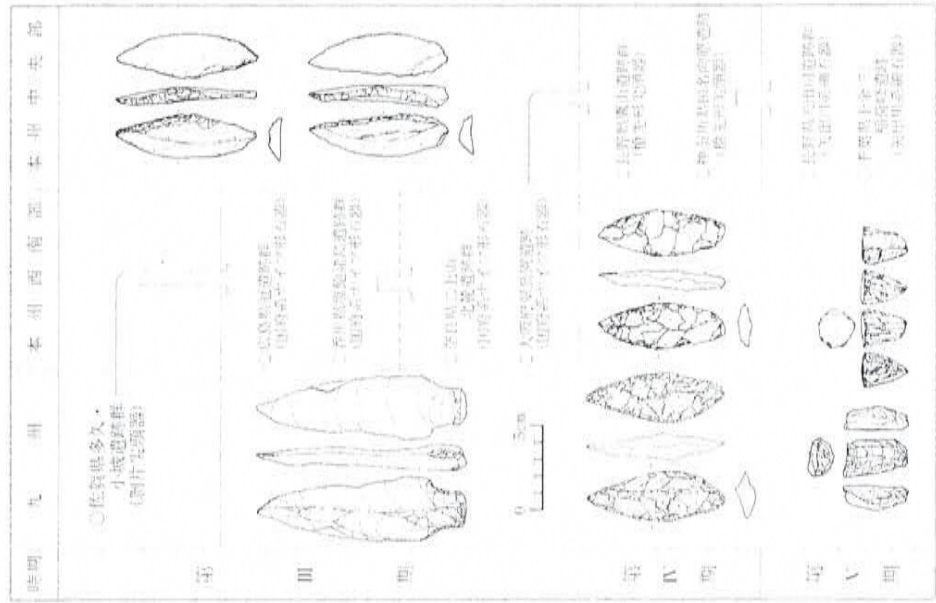
第2図 日本旧石器時代人の系譜

- ① ナイフ形石器文化
- ② 剥片尖頭器文化
- ③ 湧別系細石器文化
- ④ 国府系ナイフ形石器作り⇒槍先形尖頭器文化⇒矢出川系細石器文化

図版の出典：資料NO. 4 第1図 (小田・馬場 2001)
資料NO. 3 第1図 (千葉市文化財調査協会 1996)
を除き安祿作図



第1図 現生人類の世界拡散



第3図 大規模な石器作りの展開

【紙面発表】

『観音塚遺跡・根崎遺跡の調査成果』

公益財団法人千葉市教育振興財団 小林 嵩

今年度、中央区と若葉区に所在する2つの遺跡を発掘調査する機会がありました。両遺跡の発掘調査成果を簡単にご紹介します。

1 遺跡名 観音塚遺跡 (かんのんづかいせき)

2 所在地 千葉市中央区千葉寺町

3 遺跡の概要 都川沖積地の南側に広がる標高約15～24mの台地上に位置しています。観音塚遺跡は、千葉寺駅および駅周辺の開発にともない過去にも調査されており、今回の報告分を含め3回行われています。調査の結果、古墳時代終末から奈良・平安時代にかけての大規模なムラであることが分かっています(第1図)。

4 調査の成果 今年度の発掘調査面積は30㎡というとても小規模な調査でしたが、奈良時代の^{たてあな}堅穴住居跡と中世と考えられる溝跡が調査されました(第1図右側)。確認調査の結果も踏まえると、今回調査した範囲より北側からは堅穴住居跡などは見つかっておらず、今回の調査範囲がムラの北限となり、ムラの範囲がおおまかにですが明らかになりました。

1 遺跡名 根崎遺跡 (ねざきいせき)

2 所在地 千葉市若葉区原町

3 遺跡の概要 都川支流の^{みやこがわ}葭川に面する標高約30mの台地上に位置しています。根崎遺跡は、千葉都市モノレールの建設や土地区画整理にともない過去にも調査されており、今回の報告分を含め7回行われています。調査の結果、縄文時代中期前葉(阿玉台式期)・古墳時代終末から奈良・平安時代にかけてのムラが見つかっています(第3図)。特に奈良・平安時代にかけては大規模なムラだったことが分かっています。

4 調査の成果 今年度の発掘調査では、過去の調査と同様の時期の遺構が見つかり、阿玉台式期の^{しょうたてあな}小堅穴1基と古墳時代終末の堅穴住居跡1軒、奈良時代の堅穴住居跡2軒が調査されました(第2図)。特に、奈良時代の堅穴住居跡(SI1)からは、土器以外にも鉄製の農耕具(穂摘具2点)、SI2からは^{せいどうすい}青銅製の^{とぎん}鍍銀された^{とうそうぐ}刀装具などが見つかり、当時の暮らしぶりが垣間見えます。



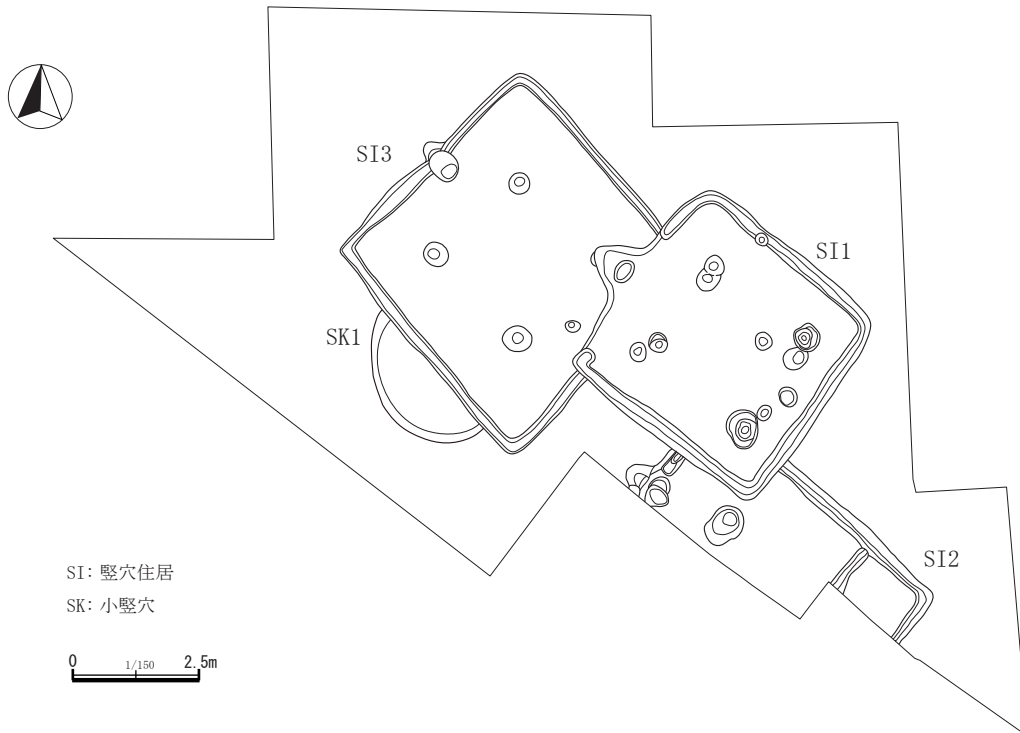
鉄製穂摘具 (SI1)



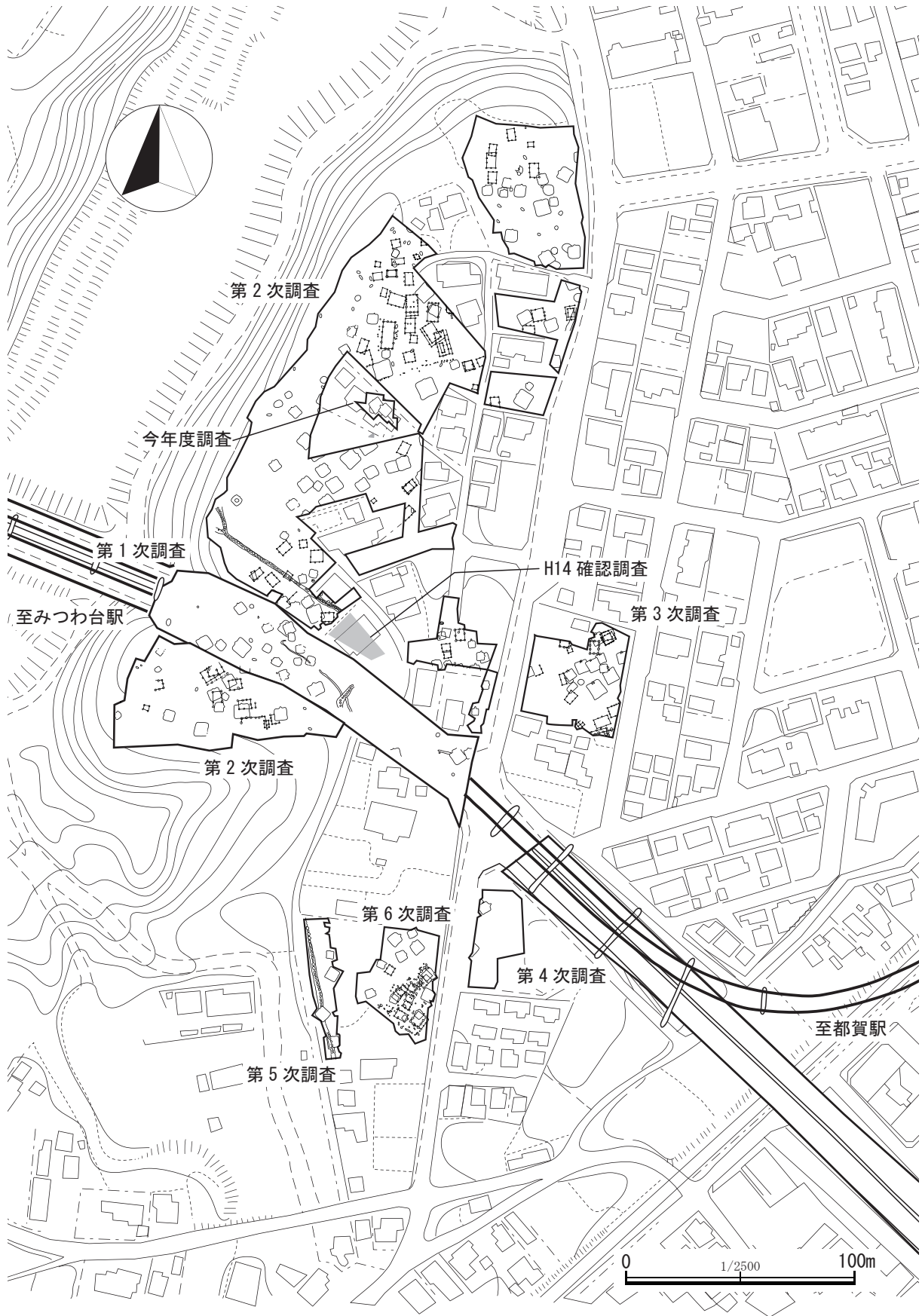
遺物出土状況 (SI3)



第1図 観音塚遺跡の調査歴



第2図 根崎遺跡遺構配置図



第3図 根崎遺跡の調査歴

千葉市歴史年表

発表内容の主な時代

年代	時代	主な出来事	市内の主な遺跡など	貝塚 加曾利	土 気 地 区	遺 跡 観 音 塚	根 崎 遺 跡
35000年前	旧石器	房総でヒトが活動し始める	葭山遺跡(緑区)				
16000年前		狩猟採集生活が始まる	南河原坂第3遺跡(緑区)				
10000年前	草創期 早期	氷河期が終わり、気候が暖かくなる	弥三郎第2遺跡(緑区)				
7000年前	前期	貝塚がつくられ始める	鳥込貝塚(花見川区)				
5500年前	縄文 中期	気候が温暖化し、海水面が上昇する	神門遺跡(中央区)				
4500年前		後期	大型貝塚・大規模集落があらわれる		加曾利貝塚[特別史跡](若葉区) 荒屋敷貝塚[国指定](若葉区) 月ノ木貝塚[国指定](中央区) 檜橋貝塚[国指定](花見川区) 花輪貝塚[国指定](若葉区)		
3300年前	先 史 弥生 前期	西日本に水田稲作が伝わる	内野第1遺跡(花見川区)				
2800年前		中期	倭国の内乱が続く	根崎遺跡(若葉区)			
(紀元前)	後期	卑弥呼が魏に遣いをだす	城之腰遺跡(若葉区) 戸張作遺跡(若葉区)				
(紀元後)		300年	前方後円墳が築かれ始める	星久喜遺跡(中央区)			
A. D. 200年	古 代 古墳 前期	このころ大和王権が国内をほぼ統一	大覚寺山古墳[県指定](中央区)				
700年		後期	仏教の伝来 聖徳太子の活躍 乙巳の変(大化改新) 平城京に都を移す	七廻塚古墳(中央区) (市指定文化財)			
800年	奈良	房総三国の成立 千葉寺の建立	人形塚古墳(緑区) 荒久古墳(中央区) 荻生道遺跡(緑区) 千葉寺遺跡群(中央区) 大北遺跡(中央区) 南河原坂窯跡群(緑区)				
1000年		平安	平安京に都を移す 平将門の乱 千葉荘の成立	芳賀輪遺跡(若葉区) 谷津遺跡(中央区)			
1200年	中 世 鎌倉	源頼朝、鎌倉に幕府を開く 千葉氏の台頭 元寇(文永・弘安の役)	猪鼻城跡(中央区)				
1400年		南北朝	足利尊氏、室町に幕府を開く				
1600年	近 世 室町	千葉氏宗家滅亡 応仁の乱	生実城跡(中央区) 小弓城跡(中央区)				
1800年		安土 桃山	豊臣秀吉、全国統一 千葉氏が歴史の表舞台から姿を消す				
1800年	江戸	徳川家康、江戸に幕府を開く 生実藩の成立 天明の大飢饉	御成街道 御茶屋御殿跡(若葉区) 生実陣屋跡(中央区)				
2000年		近 現 代 明治	明治維新	青木昆陽甘藷試作地(花見川区)			
2016年	大正		千葉市が市制施行	旧神谷伝兵衛別荘(稲毛区)			
2021年	昭和		千葉港の開港	旧第一勸業銀行本店(中央区)			
2021年	平成		政令指定都市に移行				
2021年	令和	千葉開府890年 千葉市制100年					

千葉市の歴史を学べる施設紹介

加曽利貝塚博物館

特別史跡 加曽利貝塚を紹介する博物館。
復元住居や貝層断面の観察施設なども充実。

所在地：千葉市若葉区桜木 8 丁目 33 番 1 号
TEL:043-231-0129 FAX:043-231-4986
開館時間：9 時～17 時（入館は 16:30 まで）
休館日：月曜日（月曜が祝日の場合はその翌日）
年末年始



郷土博物館



千葉の中心市街地を見下ろす台地上に建てられた城を模した博物館。千葉市の原始古代から現代までの歴史や民俗資料等を展示しており、郷土の歴史を解りやすく学べる場となっています。

所在地：千葉市中央区亥鼻 1 丁目 6 番 1 号
TEL:043-222-8231 FAX:043-225-7106
開館時間：9 時～17 時（入館は 16:30 まで）
休館日：月曜日（月曜が祝日の場合はその翌日）
年末年始



埋蔵文化財調査センター

千葉市内の遺跡から出土した石器や土器などの遺物を、旧石器時代から江戸時代までを通して常設展示しています。火おこしや勾玉づくり、組紐づくりなどの体験学習、小学校や各種団体への出前授業など、ご相談を受け付けています。

所在地：千葉市中央区南生実町 1210 番地
TEL:043-266-5433 FAX:043-268-9004
開館時間：9 時～17 時 15 分
休館日：土日、祝日、年末年始



あすみが丘フラザ



昭和・平成時代に行われた土気遺跡群の発掘調査成果を公開しています。発掘調査で明らかになった、独自の地理的な特徴を生かした土気地区の歴史の魅力をお伝えします。

所在地：千葉市緑区あすみが丘7丁目 2 番 4 号
TEL:043-295-0301 FAX:043-295-0350
開館時間：9 時～21 時
休館日：偶数月の第1月曜日、年末年始



※開館時間・休館日など、詳細は各施設にお問い合わせください。

令和2年度
千葉市遺跡発表会要旨

発行日 令和3年2月27日
発行者 千葉市教育委員会
千葉市埋蔵文化財調査センター
千葉市中央区南生実町1210番地
〒260-0814 TEL : 043-266-5433
印刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町1-10-6
〒260-0001 TEL : 043-233-2235



加曽利貝塚出土耳飾

立体画像(平行法)

画像上の●が一致するような遠目(焦点を遠くにする)で、ご覧ください。
うまく見えない場合は、左右の画像の間を紙で仕切ると見えやすくなります。



千葉市制100周年
百の歴史を、千の未来へ

千葉市埋蔵文化財調査センター

検索

